

「化粧画」の心理臨床場面への適用可能性の検討

高橋可奈子¹・石田 弓²

Investigation for clinical applicability of “Makeup-Picture”

Kanako Takahashi and Yumi Ishida

This study explores the possible application of the “Makeup-Picture” in a clinical setting, by case studies of two adolescent females. In the first case study, the characteristics of drawings which related to the oblivious type in narcissism, observed in the study of Fujihara and Ishida (2010), and those related to the new hyper vigilant type in narcissism were identified. The results of the first case study indicated that the makeup picture is a drawing method that easily allows for the projection of female adolescents’ narcissistic tendencies. The second case study showed, through the post-drawing inquiry of the makeup pictures, drawers’ awareness of the way they wanted themselves to be and how they wanted themselves to be perceived. These studies show that the makeup picture could help psychotherapists assess adolescent females’ narcissistic tendencies and how they feel about themselves. It is submitted that makeup pictures could also help the drawers themselves develop a deeper sense of self understanding and increase awareness of their narcissistic desires.

Key words: Adolescence females, Makeup-Picture, Narcissistic tendency, Post drawing inquiry

問題

青年期女性の化粧行動は日常的なものであり、あらゆる場面に応じて「他者から好まれる自己像」あるいは「こうありたい自己像」を化粧によって作り上げるという点で自己愛や自尊感情を満たすための自己表現の一種といえる。余語・津田・浜（1990）は、化粧がもたらす心理的効果として本人の自信度や満足感を挙げており、化粧は対人場面における自身のあり方に好ましい影響を与える要素の一つであると考えられる。また、公的自己意識が高い女性は全般的に化粧へのこだわりが強く、実際に求める化粧は、化粧した顔や素颜に対する自信によって異なる（菅原、1988）ことから、化粧による自己イメージの好ましい変化が対人関係を促進させると考えられる。さらに野沢・沢崎

¹ 医療法人健心会五十嵐こころのクリニック

² 広島大学大学院教育学研究科附属心理臨床教育研究センター

(2007)は、対人恐怖傾向の強い者は、自己を隠し、周りに合わせることで不安を落ち着かせるための手段として化粧をすることを示唆している。これらのことから、化粧には青年期女性の理想や願望、あるいは不安などが反映されると考えられる。そこで藤原・石田(2010)は、青年期女性の心理的側面をアセスメントするための技法として「化粧画」(Makeup-Picture)を考案した。これは、予め画用紙に描かれた女性の顔に、自分の顔に化粧をするかのように彩色させる描画法である(Figure 1)。人物画テストにおける「顔」は、描き手が外界の現実世界とどのように接触するかを象徴したり(高橋, 1974)、アイデンティティを表すもの(空井・清藤, 2001)とされている。多くの青年期女性は日常的に化粧をすることから、彼女らにとっての「顔」とは「化粧をした顔」であり、社会的ペルソナとして向社会的側面、すなわち青年期女性のパーソナリティやアイデンティティが本法に反映されることを想定し、女子大学生 107 名を対象に実施したところ、描き手の化粧技術や化粧をした自分の顔の特徴、あるいは自己愛傾向が反映されやすいことが示された(藤原・石田, 2010)。特に「自己愛人格目録短縮版」(小塩, 1998)の総合得点が高い対象者で、かつ下位尺度「注目・賞賛」、「優越感・有能感」、「自己主張性」のうち、「自己主張性」が最も高い者の化粧画には、化粧画用紙の顔のパーツからはみ出した「眉毛」や「唇」、さらに「特殊効果・目(白色を用いてアイメイクを施したもの)」、「唇の混色(2色以上の有色を用いているもの)」がみられやすいことが明らかになった。顔のパーツや画材であるクーピーペンシルの色彩といった枠を超えて、自分の思い描く形や色が自由に表現される傾向があることから、化粧画には青年期女性の自己愛傾向が投射されやすく、「こうありたい自分」が無意識のうちに表現されると考えられる。

しかし、藤原・石田(2010)では、対象者が 107 名と少数であった。また、使用尺度は誇大型自己愛傾向を測定するものであり、過敏型自己愛傾向(上地・宮下, 2005)の特性を十分に測定できるものではないことから、自己愛傾向全般との関連を検討したとは言えない。

さらに、画用紙に彩色をする行為を通して描き手がどのような体験をしているのか、完成した化粧画を振り返ってどんなことを感じるのかについても着目していない。藤掛(2004)は、「自分をみつめなおすという“自己洞察”こそが、描画における自己表出の営みのなかで特に重要なものである」と述べ、「とくに、描画という行為は、自分の描いたイメージなり、主題をみつめながら描くことになる。そこには自分の絵が自分に語りかけてくれる要素がある」とし、描画における「自己洞察」の重要性を指摘している。天満・石田・内海(2008)も、人物画における描画後の質問(Post Drawing Inquiry: PDI)が、描き手が自己理解を深めるための一助になることを明らかにしている。また、木戸(2009)は「化粧をする際には、過去の自己との対話を通して、現在の自己の姿を修正しながら他者に見られる自己を装う」と述べ、化粧を「過去—現在—未来」をつなぐ行為であるとしている。

以上のことから、化粧画においても描き手が描画そのものや描画過程を振り返ることで、化粧の実感や見た目についての描き手自身の捉え方であったり、「こうありたい、こうみられたい自分」やその背景にある思いなどのさまざまな心理的側面と向き合うきっかけになる可能性がある。そして、そのためには、描き手が化粧画そのものや描画過程で生じる感情や感覚を振り返り、吟味するための質問を行う必要があると考えられる。そこで本研究では、自己愛傾向の高い対象者における化粧

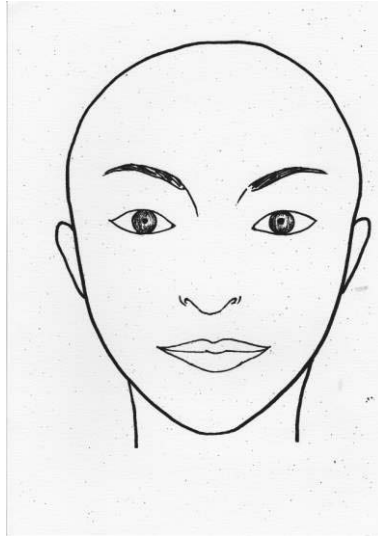


Figure 1. 化粧画用紙

画の描画特徴を把握すると同時に、化粧画の PDI を作成し、これが描き手の自己理解を促すかどうかを検討することで、化粧画の心理臨床場面への適用可能性を検討する。

研究 1

目的

青年期女性における誇大型および過敏型の自己愛傾向と化粧画の描画特徴との関連を検討し、本法が青年期女性の自己愛傾向全般のアセスメントに有用であるかどうかを明らかにする。

方法

対象者 女子大学生および大学院生 100 名（平均年齢 20.9 歳， $SD=1.92$ ）に対して個別に化粧画を実施した。

化粧画

- (1) **材料**：化粧画用紙（A4判画用紙），クーピーペンシル18色，消しゴム。
- (2) **教示**：「この画用紙に描かれた顔に，あなたが自分の顔に化粧をするかのように自由に彩色してください」

質問紙

- (1) **自己愛人格目録短縮版（Narcissistic Personality Inventory-S：NPI-S）**（小塩，1998）：成人の健常者にある自己愛人格傾向を測定するための尺度。「注目・賞賛欲求」，「優越感・有能感」，「自己主張性」の3下位尺度から構成されている。30項目，5件法。

(2) 自己愛的脆弱性尺度 (Narcissistic Vulnerability Scale : NVS) 短縮版 (上地・宮下, 2009) : 「承認・賞賛過敏性」, 「自己顕示抑制」, 「潜在的特権意識」, 「自己緩和不全」の4下位尺度から構成されている。20項目, 5件法。

結果

(1) 誇大型自己愛傾向の描画特徴

藤原・石田 (2010) で見出された自己愛傾向の描画特徴である「特殊効果・目」, 「上まつげ」, 「唇の混色」が, 本研究でも誇大型自己愛傾向の高い対象者の描画特徴としてみられるかどうかを検討した。NPI-Sの尺度得点の中央値で高群 (50名) と低群 (50名) に分け, 各項目における彩色率を比較するために χ^2 検定を行った。その結果, 高群では「特殊効果・目」, 「唇の混色」の彩色が低群に比べて有意に多いことが示された (Table 1)。Figure 2に誇大型自己愛傾向高群と低群の化粧画の典型例を示した。

Table 1
誇大型自己愛傾向高群と低群における彩色率の比較

評定項目	群	あり	なし	χ^2 値 ($df=1$)
特殊効果・目	高群 ($n=50$)	18 (36%)	32 (64%)	7.895**
	低群 ($n=50$)	6 (12%)	44 (88%)	
上まつげ	高群 ($n=50$)	11 (25%)	39 (75%)	.061
	低群 ($n=50$)	10 (20%)	40 (80%)	
唇の混色	高群 ($n=50$)	32 (64%)	18 (36%)	4.026*
	低群 ($n=50$)	22 (44%)	28 (56%)	

* $p < .05$, ** $p < .01$

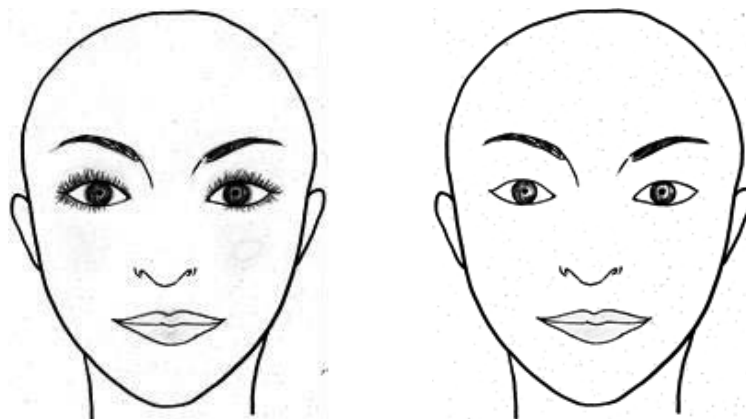


Figure 2. 誇大型自己愛傾向高群 (左) と低群 (右) の化粧画の典型例

(2) 過敏型自己愛傾向の描画特徴

「特殊効果・目」、「上まつげ」、「唇の混色」が過敏型自己愛傾向の高い対象者にもみられるかどうかを検討した。NVS短縮版の尺度得点の中央値で高群（50名）と低群（50名）に分け、各項目への彩色率を比較するために χ^2 検定を行った結果、有意差はみられなかった（Table 2）。しかし、本研究において新たに検討項目として追加した「まつげ」（上下両方を描き足したもの）、「鼻ぼかし」（クーピーペンシルの線が目立たないように鼻を彩色しているもの。例えば鼻筋を濃くしたり、周りの部分と濃淡に変化をつけたりしているもの）においては、高群の彩色が低群よりも有意に少ないことが示された（Table 3）。Figure 3に過敏型自己愛傾向高群と低群の化粧画の典型例を示した。

Table 2
過敏型自己愛傾向高群と低群における彩色率の比較

評定項目	群	あり	なし	χ^2 値 (df=1)
特殊効果・目	高群 (n=50)	14 (28%)	36 (72%)	.887
	低群 (n=50)	10 (20%)	40 (80%)	
上まつげ	高群 (n=50)	8 (16%)	42 (84%)	1.507
	低群 (n=50)	13 (26%)	37 (74%)	
唇の混色	高群 (n=50)	28 (56%)	12 (44%)	1.000
	低群 (n=50)	23 (46%)	17 (54%)	

Table 3
過敏型自己愛傾向高群と低群における追加項目の彩色率の比較

評定項目	群	あり	なし	χ^2 値 (df=1)
まつげ	高群 (n=50)	24 (48%)	26 (52%)	4.105*
	低群 (n=50)	34 (68%)	16 (32%)	
鼻ぼかし	高群 (n=50)	10 (20%)	40 (80%)	3.934*
	低群 (n=50)	19 (38%)	31 (62%)	

* $p < .05$

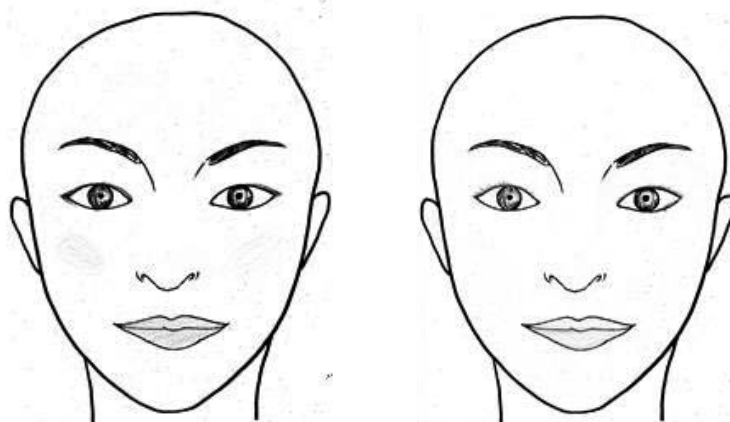


Figure 3. 過敏型自己愛傾向高群（左）と低群（右）の化粧画の典型例

考察

(1) 誇大型自己愛傾向の描画特徴

藤原・石田（2010）で、自己愛傾向全般が高い女子大学生にみられた「特殊効果・目」、「上まつげ」、「唇の混色」のうち、「特殊効果・目」、「唇の混色」が本研究でも誇大型自己愛傾向の高い女子大学生にみられた。これらは、誇大型自己愛傾向における描画特徴として信頼性が高いものであると考えられる。

高橋（1974）は、人物画テストに描かれる目は「心の窓」あるいは外界と接触する最も大切な部分であるとしており、まつ毛は女性像の目に描かれやすく、女らしさを示唆し、他人の注目を得ようとしたり、華やかさを求める被検者によって描かれがちであると述べている。一方、Gabbard（1994）は誇大型自己愛者の特徴として、傲慢、自己への没頭、注目願望、自己主張性、他者への関心のなさを挙げている。本研究における誇大型自己愛傾向の高い女性は健康度の高い女子大学生であり、自己愛人格障害ではないが、自己愛傾向の高さから Gabbard の挙げる誇大型の特性を備えていると考えられる。誇大型自己愛傾向の女性は化粧画で目の周辺における彩色が特徴的であったが、それは自己に没頭し、周囲の注目を集めようとするパーソナリティ特性によるところが大きいと考えられる。すなわち、相手に与える自分の印象を最も変化させやすい「目」にこだわった化粧を施すことで、より自分を魅力的にみせることが可能になり、他者からの注目を集めようとする心理が反映されていると考えられる。「特殊効果・目」は白色によってなされるため、有色に比して直接的に視覚に訴えるものではないが、日常的に行われている化粧においても、目をはっきり大きくみせるためや、表情の印象を明るくみせるために白のアイシャドウがハイライトとして化粧のポイントに使用されている。周囲の注目を集めるために「より美しくみせたい、こうみせたい自分」をアピールしようとする自己愛的願望を有することで、化粧画用紙の顔であるにもかかわらず、普段から自分が行っている最も自分の魅力を表現できる化粧を細部まで再現したと考えられる。

一方、本研究では誇大型自己愛の特徴とならなかったものの「まつげ」も、誇大型自己愛傾向高群で比較的多くみられた。「まつげ」も「特殊効果・目」と同様に目を大きくみせたり、顔の全体的な印象を華やかにみせる効果があるという点で、他者に与える印象を操作し魅力的にアピールすることが可能である。よって、「まつげ」の描き足しを含め化粧画における目の周辺への彩色には、みせたい自分を他者にみせようとする誇大型自己愛心性が表れやすいと考えられる。

また、本研究でも「唇の混色」は誇大型自己愛傾向の特徴として挙げられた。高橋・高橋（2010）は、人物画テストにおける口は食物を受け取る受動性や、かむという攻撃性の機能をもつ器官であると同時に、コミュニケーションを行う器官であり、また性的な意味も象徴するとしている。さらに、唇は自己愛傾向や他者からの是認を求める欲求を示すサインでもありとしている。藤原・石田（2010）が述べているように、「口」は意見を表明するための器官であり、誇大型自己愛傾向の特徴である自己主張的な側面が投射されている可能性がある。日常的な化粧において口紅を塗る（唇に色を乗せる）という行為は、女性的な魅力を視覚的に主張することである。こうした自己主張の方法と密接に関連する「唇」を入念に彩色する「混色」は、自分にとってより魅力的と感じられる

自分を思いのままに表現したいという意識的・無意識的願望の表れであると考えられる。

なお、近年、白色を用いたハイライトのようなポイントとして用いられる化粧は、若い女性たちの間で取り入れられることが増えてきており、鮮やかな色の化粧で彩られた顔をさらに魅力的にみせようとする「こだわり」を反映していると考えられる。誇大型自己愛傾向の高い女性は化粧に対して、自分の魅力を高めたり、気分を盛り上げてくれるものであると期待し、化粧画においても自分の顔に化粧するかのように「特殊効果・目」のようなあまり目立たない細かな彩色にもこだわるものと推察される。

(2) 過敏型自己愛傾向の描画特徴

誇大型自己愛傾向でみられた「特殊効果・目」、「上まつげ」、「唇の混色」が、過敏型自己愛傾向の高い女子大学生にも表れるかどうかを検討したが、高群と低群で有意差はみられなかった。しかし、本研究で新たに追加した「まつげ」や「鼻ぼかし」については、高群は低群より有意に少ないことが示された。Gabbard (1994) は、過敏型自己愛に相当する過剰警戒型について、他者からの反応を気にし、注目を避けたがる一方で、心の奥底に自己顕示欲求を抱いており、その欲求を強く恥じているという特徴を挙げている。そのため過敏型自己愛傾向の高い女子大学生は、誇大型自己愛傾向の高い女子大学生にみられる「特殊効果・目」、「上まつげ」、「唇の混色」のように、自身をより魅力的にみせ、他者からの注目を集めるような化粧に関する彩色をしなかったと考えられる。化粧画用紙には「まつげ」が描かれていないため、「まつげ」の描き足しは描き手の自発性によるものであるが、過敏型自己愛傾向高群では誇大型自己愛傾向とは異なり、化粧画でも目立ったり、他者からの注目を集めやすいような「まつげ」を描き足さなかったと考えられる。

同様に「鼻ぼかし」も過敏型自己愛傾向の高い女子大学生では少ないことが示された。これは、鼻の輪郭を白色や色の濃淡（陰影）で表現した鼻の彩色で、鼻をさりげない形で強調しようとするものであるが、他者の反応に敏感な過敏型自己愛傾向の高い女子大学生は他者からの注目を避けようとする心性を有するため、化粧画でも鼻を強調することがなかったと考えられる。

研究2

目的

PDIを用いて対象者に化粧画やその描画過程を振り返らせ、描き手にとっての「こうありたい、こうみられたい自分」、およびその背景にある願望や理想を含む自分のあり方への気づきが促されるかどうかを検討することで、化粧画の心理臨床場面への適用可能性を示すことを目的とする。まず予備調査にて気づきを促しやすいPDIの項目を吟味した上で本調査におけるPDIとして用いる。

方法

予備調査

(1) 対象者 女子大学生および大学院生 15 名（平均年齢 22.6 歳， $SD=0.99$ ）に個別で実施した。

(2) **化粧画** 個別に描画を実施した後、HTP法（Buck, 1948 加藤・荻野訳, 1982）の描画後の質問のうち「人（Person）」の項目を参考に作成したPDI原案を用いて半構造化面接を実施した。

本調査

(1) **対象者** 研究1と同様。

(2) **化粧画** 予備調査と同様。ただし、使用するPDIは予備調査で吟味したものとす。

結果

予備調査

対象者に化粧画と原案12項目を実施したところ、質問⑩～⑫では「こうありたい、こうみられたい自分」を振り返りやすいことが示された。原案12項目の典型的な回答をTable 4に示した。

Table 4
予備調査における PDI 項目と典型的な回答

質問項目	回答
①化粧をしているときの感じと、彩色しているときの感じを比べてどうですか？	多色だから普段とは違う色でやってみようかな。想像力が湧く感じ。色塗って感じではない。
②綺麗に化粧できましたか？	できた。けばい。いつもやらないからやってみた。
③この絵を見てどこが気に入っていますか？どういったところからですか？	目は力強くみえるから。頬は血色よくてチークっぽくできたから。
④どのあたりを慎重に描かれましたか？どういったところからですか？	あるとすればまつ毛。目を印象的にみせたいが自然な感じにみせたい。普段はほとんどしないから変身願望。
⑤こうしたかったというところがありますか？どういったところからですか？	髪の毛を描きたかった。スキンヘッドだから。
⑥この絵の人の化粧をみて、どう思いますか？	なんかけばい。化粧品売り場の人みたい。けど、嫌いじゃない。
⑦この絵の人の化粧からどんな人を想像されますか？長所？短所？それはどういったところからですか？	30代。ちょっと大人っぽい感じ。しっかりしてそうで、仕事ができそう。全体的にきちっと塗っている感じ。短所はきつそう。パーツごとにはっきりしているから。
⑧この絵の人の化粧はどんな場面での化粧ですか？	お仕事。
⑨この絵の人を周りはどうみていると思いますか？	仕事では信頼できるけどズバツとものを言うから。苦手に思っている人もいそう。
⑩他の人にどんなふうに見せたいですか？それはどういったところからですか？	目は印象的にみせたい。しっかりしている人に見られたい自分があるんだろう。それが絵に出た感じ。
⑪この絵の人は自分に似ていますか？	似ているところもあるけど、人からみたらどうだろう？自分はズバツと言わない。言わないようにしているつもり。だけど言いたいのかな？
⑫振り返ってみて、自分について気づいたことはどんなことですか？	描画だといろいろ挑戦できて、そうみられたい私がいるんだと思った。しっかりしていると周りからも思われたい。地に足をつけたい。

本調査

(1) 質問項目作成意図と回答の合致の検討

予備調査で用いたPDI原案を改訂し、本調査におけるPDIとした。そして、これが自分への気づきを促す質問として適切であることを確認するため、対象者から得られた回答が質問作成の意図とどの程度合致しているか検討した。その結果、質問⑥を除いて100名中70名以上の対象者の回答が質問作成意図と合致していた (Table 5)。質問⑥では、意図していた「自分自身がどのようにみられていると感じているか」だけではなく、「周りからこんなふうにみられたい」や「自分が自分をどうみているか」といった思いも反映されやすいことが明らかになった。作成意図と合致した気づきが得られた対象者の回答の典型例をTable 6に示した。回答の中で該当する個所には下線を施した。化粧画をみながらPDIによって筆者らとともに振り返る中で、化粧画の人物が自分のように感じられ、自分のあり方についての気づきが促されることが示された。

Table 5
PDI 項目の作成意図と回答の合致

質問項目	作成の意図	合致人数
①この絵を描いて化粧をしている感覚がもてた点、もてなかった点はどんなところですか？それらを踏まえて全体的にはどうでしたか？	描き手はどの程度化粧を再現しようとしているかに気づく。面接者は描き手の自己が投映されやすいかを理解する手掛かりになる。	100
②思った通りにできましたか？どういふものを思い描いていましたか？それはどうしてですか？	「こんなふうにみせたい」という描き手の欲求に気づく。	70
③この化粧をみてどこが気に入っていますか？それはどうしてですか？	化粧でうまくいくところ、いかせたいところに気づき、描き手の理想を理解する手掛かりになる。	86
④どんなところを慎重に描きましたか？それはどうしてですか？	描き手のコンプレックスに気づき、その理由を理解する手掛かりになる。	96
⑤この化粧からどんな人を想像しますか？それはどうしてですか？	描き手の理想像や現実の自分について思うことが投映される可能性がある。	89
⑥この人を周りはどうみていると思いますか？	描き手が自身をどのようにみられていると感じているかを理解する手掛かりになる。	19 「周りにどうみられたいか」57 「自分自身をどうみているか」29
⑦この人はこの化粧でどうみせようとしていますか？それはどうしてですか？	描き手が他者にみせたい理想的な自己像を理解する手掛かりになる。	100
⑧化粧の前後でこの人の自己イメージはどんなふうに変わりますか？それはどうしてですか？	自己イメージの変化から、描き手が化粧に求めるものを理解する手掛かりになる。	93
⑨このような人に親近感はもてますか？	今までの回答を踏まえ、自分の在り様について振り返るきっかけになる。	79
⑩化粧画を試み、自分について考えたことや気づいたこと、また感想があれば教えてくださいいただけますか？	今までの回答を踏まえ、自分の在り様について振り返るきっかけになる。	77

Table 6
「自分のあり方」への気づきの典型例

質問項目	回答
①この絵を描いて化粧をしている感覚がもてた点、もてなかった点はどんなところですか？それらを踏まえて全体的にはどうでしたか？	感覚がもてた。なるべく自分の顔に近づけようと思って。道具も普段のを使っているよう意識した。
②思った通りにできましたか？どういふものを思い描いていましたか？それはどうしてですか？	大体、自分の顔に近づけたかった。いつもと違うと自分の顔にはできないと思った。
③この化粧をみてどこが気に入っていますか？それはどうしてですか？	アイメイクのグラデーション。普段通りできたから。
④どんなところを慎重に描きましたか？それはどうしてですか？	グラデーションのところ。実際の色に近づけるにはどうしたらいいかなと思った。再現するようにぼんやり塗った。
⑤この化粧からどんな人を想像しますか？それはどうしてですか？	普通の人。変わっているわけでもなく、すごくかわいいわけでもなく。全体的な感じから思った。塗り方も奇抜でなく自然。
⑥この人を周りはどうみていると思いますか？	あまり目立たない、普通の人。
⑦この人はこの化粧でどうみせようとしていますか？それはどうしてですか？	普通のすっぴんよりは綺麗にしたい。ただ、派手にならないように。目立つのが好きじゃないのかも。人からみられるときに素をみられるのも嫌。目にとまるのも嫌。とけ込みたいから派手、変と思われるのは嫌。流されたいと思う。ごく一般的な状態でそこに居たい。当たり障りのない感じがいい。たまたま、他の化粧がしたくなるかもしれないけど、普段落ち着くのはこれ。馴染む感じ。
⑧化粧の前でこの人の自己イメージはどんなふうに変りますか？それはどうしてですか？	ちょっと綺麗。人の中に普通にいられる感じになる。何かしないしていると違和感を抱く。化粧をしている人が多いから、化粧をすることで馴染めると思っているのかも。
⑨このような人に親近感もてますか？	化粧をすることで漸く馴染めるようになる感じ。化粧するのが最低限の儀式だから、自己主張したいのではなく普通にいたいという感じで親近感もてる。奇抜ではないとか、その人の顔にあった化粧をしているというところで親しみやすさを感じる。違和感がない。その人らしいなと思えるのが好きだし、似合っているというのがいいから親しみがわく。
⑩化粧画を試み、自分について考えたことや気づいたこと、また感想があれば教えてくださいませんか？	目立たないようにしているんだなと思った。質問で自分がどうしようと化粧をしているのがわかった気がした。奇抜なのや変わったのは普段からできなくて、一番目立たないようにしているのかなと思った。馴染めていない感じがあるんだなと思って。化粧していない、素だと馴染めない感じがあるんだろうな。馴染むために一段階、儀式が必要なんだと思う。感想としては楽しかった。上手く再現出来たら良かったかな。顔の作りは自分と違うけれど、同じ化粧をしているこの人について答えると、自分のことっぽい感じがした。自分で自分を作っている感じ。客観視してみている感じ。

※自分のあり方への気づきが特に得られたと考えられる箇所に下線を施した。

(2) 気づきが促されやすい質問項目の検討

PDIによって描き手にとっての「こうありたい、こうみられたい自分」への気づきが促されたり、こうした思いの背景を振り返るきっかけになるかどうかを検討した。「こうありたい、こうみられたい自分」について新たに気づいたものを「発見」、日頃自分について考えていたものを「内省」としてPDIへの回答を検討した結果、質問⑦、⑩、⑨、⑧の順に気づきが多く、⑦と⑩では対象者の約半数に気づきがみられた (Table 7)。特に質問⑦では他の質問項目と比較して、「こうありたい、こうみられたい自分」への「内省」、質問⑩では「発見」が得られやすいことが明らかになった。

Table 7
質問⑦～⑩における自分への気づきの回答数の比較

	質問7	質問8	質問9	質問10
発見	2	5	6	33
内省	53	18	36	19
気づいた人の合計	55	23	42	52

Table 8
質問⑦～⑩における自分への気づきの内容の典型例

質問項目	気づきの種類	カテゴリー	回答例	人数
⑦どうみせようとしていますか？	発見	外見	血色良く元気の良い人にみられたいのかな。目かってことは皆の印象に残りたい、顔を覚えてもらいたいのかな。	1
		かかわり方	ナチュラルにかかわってほしいのかもしれない。	1
	内省	外見	コンプレックスがあるから、目を大きくみせてちよつども良くみせたい。	35
		自分のあり方	真ん中で揺れている。自分のスタイルを探している。	9
		理想	明るく、自分から前に出ていける人にみられたい。言えないでいるのを後悔したくないから。強気に。	9
気づいた人の合計				55
⑧化粧前後で自己イメージはどう変わりますか？	発見	自分のあり方	自己イメージは化粧した状態。素の方が恥ずかしい。	3
		外見	より明るく、若々しくみせたいと思っているのかも。	1
		理想	自分の化粧とよく似ているがこういう人だったらすごいと思う。少し尊敬する。	1
	内省	自分のあり方	化粧をすることで知ってほしい自分が伝わりにくくなると思う。	14
外見		何もしていない自分が華やかに、明るくなる。堂々できる。	4	
気づいた人の合計				23
⑨親近感もてますか？	発見	理想	自分より素敵で理想的な人。近づきたい目標だと気づいた。見た感じは似ているけど、もっているものは違う。	5
		外見	目の周りが真っ黒なのは怖い。このくらいの方が気負わなくて近づきやすいだろうと思った。	1
	内省	自分のあり方	性格は真反対だが、義務だと思って化粧している点で自分と重なる。	20
		理想	派手じゃなく、落ち着いている性格が好きだから。	10
	外見	自分の手入れをきちんとしているのが自分と同じ。	6	
気づいた人の合計				42
⑩自分について気づいたことや感想があれば教えてください。	発見	理想	穏やかで優しくて、でも華やかで知的な人に憧れているのかも。この絵にそんなふうに見えるということは、みられたいことの表れかもしれない。	10
		自分のあり方	素だと馴染めない感じがあるんだろう。馴染むために必要なのが化粧っていう一段階だったのかも。	15
		外見	鼻に白を入れた。拘りがある。明るく、強くみせたいのだろうと思った。	8
	内省	自己投射の不安	自分と重なってしまって考えるのがしんどい。	7
		外見	前と印象が変わった。心境の変化があって、大人っぽくみられたい。外からだけでも近づけよう。	7
		自分のあり方	できるなら飾ることなく済ませたい。興味持ったらいいのかな。女らしいのが苦手。	4
	理想	こう思える自分について内省していることを意識化して質問に答えていたように思う。	1	
気づいた人の合計				52

次に、質問⑦～⑩で得られた「こうありたい、こうみられたい自分」への気づきがあった回答の内容をさらに検討したところ、「発見」、「内省」の下位分類として主に「理想」、「自分のあり方」、「外見」の3つの共通カテゴリーを見出すことができた。気づきの中でも「内省」した人数が53名と半数を超えた質問⑦では、「外見」への内省が最も多かった（35名）。また、「発見」が多かった質問⑩では、「自分のあり方」についての発見が最も多かった（15名）。同質問への回答「内省」の中

には、化粧画の人物と自分自身が重なり、不安感が生じるという「自己投映の不安」が数名みられた（7名）。質問⑩に次いで、気づきの多かった質問⑨では「自分のあり方」への内省が最も多かった（20名）（Table 8）。

考察

（1）質問項目作成意図と回答の合致

予備調査を経て作成した化粧画のPDIが、描き手の自分への気づきを促すものとして妥当であることを確認するため、作成意図と質問への回答が合致しているかどうか検討したところ、回答は作成意図に概ね添うものであった。本研究では、青年期女性にとって日常的になじみのある化粧という視点から自分への気づきを促すのに適したPDIを作成することができたと考えられる。

特に質問⑥（この人を周りはどうみていると思いますか？）は他の項目と異なり、想定していた「描き手が、自分自身が周りからどうみられていると感じているか」だけでなく、「周りにどのようにみられたいか」、「自分は今の自分をどうみているか」の理解を促されることが明らかになった。高橋・高橋（2010）は、人物画テストの被検者が他者を描きながら、無意識のうちに、その人物に自分自身を表現している場合が多いと述べている。化粧画では、自分にするように化粧を施した化粧画の人物についての質問を通して自分が周りにどうみられたいか、あるいは自分が自分のことをどのように感じているかといった自己意識が意識化されやすかったものと考えられる。

研究1では、化粧画には自己愛傾向が投映されやすいことが示され、PDIに答える中で自身の願望や欲求が意識化される可能性が示された。このことは、「他者が自分をどうみているか」ということよりも、「自分が他者にどうみせたいと感じているか」についての気づきを促す点で、作成したPDI項目が臨床的な適用可能性を有していると考えられる。

（2）気づきが促されやすい質問項目

質問⑦～⑩では自分への気づきが促されやすく、質問⑦では、化粧画に自分らしい化粧をしたことで自分を周りにどうみせようとしているのかを振り返ることが容易になり、「外見」に関する「内省」につながったと考えられる。一方、質問⑩では、それ以前の質問によって意識化された自分の化粧の様相、化粧の過程、化粧画に表現された自身の願望や欲求への気づきが集約することになり、「自分のあり方」についての「発見」という新たな気づきにつながりやすと考えられる。

さらに、質問⑦～⑩で得られた自分への気づきの内容を分類したところ「発見」、「内省」とともに「理想」、「自分のあり方」、「外見」を共通カテゴリーとして挙げるのが可能となった。このことは、作成したPDIが、「こうありたい、こうみられたい自分」への気づきを促すことに適していることを示すものである。

総合考察

（1）本研究の成果

本研究では、青年期女性を対象として、化粧画の心理臨床場面への適用可能性を検討した。研究1では、化粧画が青年期女性の自己愛傾向をアセスメントするための一助となりうることを示した。特に本研究で新たに扱った過敏型自己愛傾向の高い女性は、誇大型自己愛傾向の高い女性とは異なり、「まつげ」、「鼻ぼかし」といった他者の注目を引きやすい化粧に関する彩色をしない傾向にあることが示された。研究2では、作成したPDIによって描き手の「こうありたい、こうみられたい自分」、すなわち、願望や理想を含む自分のあり方への気づきが促されることを示した。これにより本法は、面接者が描き手の自己愛的傾向や自己のあり方を理解するために役立つだけでなく、描き手が「こうありたい、こうみられたい自分」を振り返り、自己理解を深めるための一助にもなると考えられる。

(2) 今後の課題

今後は、化粧画を心理面接の中で活用し、心理臨床家が青年期をはじめとして自己のあり方を模索する女性クライアントの自己愛傾向を把握したり、クライアント自身が化粧画を介した語りによって「こうありたい、こうみられたい自分」への気づきを得て、理想や願望のみならず、現在の自分のあり方について目を向けることが可能になるかどうかを検討する必要があると考えられる。

引用文献

- Buck, J. N. (1948). The H-T-P technique: a qualitative and quantitative scoring manual. *Journal of Clinical Psychology*, **4**, 317-396. (加藤孝正・荻野恒一 (訳) (1982). HTP 診断法 新曜社)
- 藤原可奈子・石田 弓 (2010). 臨床描画法「化粧画」の考案と有用性の検討—青年期女性にみられる自己愛的傾向と強迫的傾向との関連から— 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, **8**, 133-148.
- 藤掛 明 (2004). 描画テスト・描画療法入門—臨床体験から語る入門とその一歩あと 金剛出版
- Gabbard, G. O. (1994). *Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-IV edition*. Washington, DC. : American Psychiatric Press.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2005). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性 パーソナリティ研究, **17**, 280-291.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2009). 自己愛的脆弱性尺度の妥当性の検討—友人関係への影響の検討を通して— 岡山大学大学院教育学研究科研究集, **140**, 1-6.
- 木戸彩恵 (2009). 化粧行為にみられる自己—他者間の対話的關係性への考察— 京都大学大学院教育学研究科紀要, **55**, 364-375.
- 野沢桂子・沢崎達夫 (2007). 対人恐怖傾向と化粧の効用意識との関連 目白大学心理学研究, **3**, 95-108.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 日本教育心理学会 日本教育心理学研究, **46**, 280-290.
- 小塩真司 (2006). 自己愛傾向と5因子性格: 自己愛傾向の2成分モデルの特徴 中部大学人文学部

研究論集, **16**, 55-69.

空井健三・清藤理恵 (2001). 人物画から見た青年の変化 発達, **86**, 57-70.

菅原健介 (1988). 对人的不安研究における公的自意識の定義 東京都立人文学部編 人文学報, **196**, 103-116.

高橋雅春 (1974). 描画テスト入門—HTPテスト— 文教書院

高橋雅春・高橋依子 (2010). 人物画テスト 北大路書房

天満弥生・石田 弓・内海千種 (2008). 人物画テスト2枚法の臨床的有用性の検討—自己理解を促す「描画後の質問」の考案— 徳島大学総合科学部人間科学研究, **16**, 145-163.

余語真夫・津田兼六・浜 治世 (1990). 化粧が容貌印象に及ぼす影響 日本心理学会第54回大会発表論文集, 715.